

クラウゼヴィッツと現代戦略思想の危機

ロンドン大学キングズ・カレッジ教授

ジャン・ヴィレム・ホーニツヒ

(荒川 憲一 訳)

クラウゼヴィッツは戦略の理解に深刻な負の影響を及ぼしている。本稿では現代に焦点を絞り、クラウゼヴィッツの戦略思想の内面化がどのように西洋の現代紛争への対応に根本的な問題を生み出しているかについて考えたい。

本質的に戦略とは手段を目的に適用させることであるにもかかわらず、軍事史家も軍人も前者のみを変数と考えてきたきらいがある。手段を変えることが戦争の様相を変える決定的要素と広く考えられている。戦争はどのようなものか——戦争の目的は——通常は不変である。しかしながら、中世の戦争が明確に示しているのは、戦争が単に現代とは全く違った手段で戦われ得るだけでなく、根本的に異なった目的のためにも戦われ得るということである。結局、戦争目的に関してだけでなく、戦争の方法と手段に關しても、戦争の多面的様相を決定するのはこの文化的に決定された変数である。先進国が異文化との多くの潜在的な紛争に直面

している現代世界では、それらの紛争への介入が成功するか否かの鍵は手段よりもむしろ、まず戦う理由と目的にしかるべく注意を払うか否かである。

冷戦終了後、世界ではいわゆる「民族」紛争や「国家内」紛争が勃発し、西洋の多くの政府や軍隊がこれに神経質になっている。この種のタイプの紛争は（いわゆる「ならず者国家」に支援されたテロリズムとともに）西洋の安全保障にとって主たる脅威と考えられている。⁽¹⁾ 政治家は極端に警戒して、おおげさとも思えるほど過敏にこうした紛争に反応している。彼らはこの種の紛争は容易に解決しない問題なので、大量の軍隊を投入しないことにはどうやってうまくいかないかと主張している。同時に、政治家たちはこれらの紛争は国の生存にかかわるような利害とあまりにもかけ離れているので、本格的に軍事介入するに値し得ないと主張している。軍人も同様に考えている。彼らもまた介入する

とすれば大規模な介入以外には反対であるが、大規模な軍事介入は政治家の支持をほとんどもしくは、全く得ることができないことがわかつている。このような姿勢、つまり現代世界では軍事力は圧倒的なものでない限り行使しても機能しないという考えは、戦争や戦略に関する重大な欠陥のある理解に基づいている。実際、西洋の戦略思想は危機に直面している。この危機は長い時間を経て生じてきたものであるが、冷戦が終焉してはじめてその本当の程度が明らかになり始めている。

本稿ではまず戦略思想の危機の本質について考える。これらの問題の根本にはクラウゼヴィッツの存在があるので、本稿の前半の部分では、この偉大な思想家の思想に焦点をあてる。後述するように、この戦略思想の危機は先進国が直面する可能性のある紛争を戦ったり、解決したりするには全く不適切なクラウゼヴィッツの戦略ドクトリンが西洋を支配していることが原因である。代わりに、ここで必要なのは制限戦争 (limited war) という概念ないしはドクトリンである。筆者はここで詳細な概念ないしはドクトリンを提示するつもりはない。本稿ではいくつかのパラメーター (特質ないしは要素) を提示するにとどめたい。

本稿の一部はマーチン・ファン・クレフェルトが『将来の戦争』で述べた見解⁽²⁾に非常に類似しているが、いくつかの重大な違いもある。例えば、クレフェルトはクラウゼヴィッツや彼の同時代の信奉者たちが紛争は国家をベースにしたもの、あるいは「三

位一体」の戦争の域を脱していることを認識できないであると批判しているが筆者はそう考えない。全軍事力の発揮は政府、軍隊、国民という三位一体間の相互作用の所産であるとのクラウゼヴィッツの考えは、おそらく国家という概念がベースになっている。しかし、この概念は国家を形成していない、争い続けている社会組織の形態にも容易に適用できる。いかなる共同体にも指導者がおり、戦士がおり、そして一般の人々がいる。残念ながらクラフェルトの「国家批判」は三位一体、国家ないし共同体をベースにした成員の動機と規範をクレフェルトが強調していることの計り知れない価値を損なっている。戦争は「国家的な理由」のためにのみ戦われるものではなく、宗教や法的要素も等しくあるいはそれ以上に重要となり得るとする彼の主張は全く正しい。同様にあらゆる戦闘員は何等かの因襲や「戦争法規」を忠実に信奉するとする彼の主張も重要である。動機と規範は西洋の戦略思想の危機を解決できるか否か、さらには、我々が直面している脅威への対処法を理解するのに必要な鍵となる変数である。

クラウゼヴィッツは西洋世界ではかつてないほど人気が高くなってきている。最も驚くべきは英米で、彼の主著『戦争論』が成功したことである。一九七六年に刊行されたマイケル・ハワードとピーター・パレットによる英訳版⁽³⁾は、それ以前の英訳版である J・J・グラハムの一八七四年版、一九〇八年の改訂版、並びに O・J・マテス・ジョルズの一九四三年版⁽⁴⁾とは極めて対照的にた

いへんな売れ行きを示した。ハワード卿自身も認めているように、その印税は彼の「快適な老後」を約束した。察するにそれほど満足な売れ行きではなかったグラハムの翻訳でも、一九六八年にペンギン社から縮刷版が出版されて以来、すでに二五万部は売れている。この成功をどう説明したらよいのであろうか。戦争という主題に対してクラウゼヴィッツの思想でアプローチするには課題が多い。クレフェルトが示唆しているように、「理論と歴史的事実とを常に並置させる」ことが近代の学界にうけが良く、多くの戦争従事者（軍人）にもあまり嫌悪感を起こさせない手法である。彼の思想には、ハワードとパレットによって特に価値あるもので実際的重要性を持つものとして繰り返し指摘されているものが二つある。戦争は政治の手段であるという主張と、戦争には、制限戦争と総力戦争という二つのタイプがあるという主張である。

これらの二つの考えが、若い頃は第二次世界大戦の経験に大きく影響され、学者になってからは冷戦の影の下を生きた二人に特に印象的であった。パレットはナチズムから逃れてきた政治難民として、また、ハワードは英国陸軍将校として、ともにドイツで政治的配慮がどのように戦争の軍事的要請に屈したか、そして、どのようにして戦争が結果的にますます意味のないものになっていくかを直接、目撃した。英米の側も、戦争を文民が民主的にコントロールしようとしたため極度の苦しみを経験した。

合理的な政治目的と軍事戦略との間の明確なつながりを再確立しようとする試みは、冷戦時代になってもその妥当性を少しも失うことはなかった。米国と英国が史上最大の平時の軍事力を構築した時、紛争の生起によって軍事的要請があり、再び政治的配慮の優越が危機にさらされた。さらに、核兵器の破壊的な効果がかつてないほど戦争をコントロールし、紛争を制限し続けなければならぬことを強く要求した。こうして、クラウゼヴィッツのような偉大な軍事思想家が、すでにこのような問題について著作で中心的に論じていたことが幸運であるように思われたのである。

しかし、ハワードとパレットには大きな問題がある。彼らはこれらの議論をかなりの程度クラウゼヴィッツの中から読みとつた。⁽⁵⁾ところがこれらの議論はいずれも二人が主張したほど、クラウゼヴィッツの中心をなす論点ではなかった。クラウゼヴィッツが生きていた時代には、戦争は他の手段をもってする政策の継続であるという見解は明らかにひとつの仮説であった。この見解は当時、ヨーロッパの軍事思想家の全員ではないにせよ大多数が共有していたものである。他の思想家と同様に、クラウゼヴィッツにとつても戦争は当時のヨーロッパの君主たちが手にするひとつの道具以外の何ものでもないと思えなかった。クラウゼヴィッツの理論は国家によって支配された国際システムの存在を基礎に構築されている。⁽⁶⁾彼が『戦論』(このタイトルを見よ!)を書いた本来の狙いは、戦争と政治の相互関係がどのよう

に機能しているかを説明するためではなかった。むしろ、戦争という現象の内部の動きを分析したかったのである。一般に考えられているように、彼はこれを分析する時、当時の出来事にたいへん影響を受けている。一八〇六年、ナポレオンの手によるプロシアの壊滅的敗北は（彼は青年将校としてこの敗北を目撃した）、彼の生涯に大きな影響を及ぼした事件である。⁽⁷⁾この事件はクラウゼヴィッツの思想の根本的な要素のひとつとなったものを呈示してくれる。それはアザー・ガットが「破壊という至上命題」と呼んだものである。⁽⁸⁾クラウゼヴィッツはナポレオンが戦争の本質を明らかにしたと考えていた。戦争とは力の行使であり、その本質的な狙いは敵の無力化である。⁽⁹⁾この目的を達成する抜群の方法が殲滅戦争である。

それゆえ、限定的な作戦目的のために戦われるいかなる戦争もクラウゼヴィッツにとつて異常なことであつた。仮に敵が味方を無力化することを狙いにして決戦を強要してくるならば——ナポレオンが一八〇六年のイエナとアウステリッツでの戦闘でプロシアに対してそうしたように——味方もまた敵に対して同じことをするしか選択の余地はない。クラウゼヴィッツは言葉を換えて言えば、一方がこの根本的な原則の存在を理解するやいなや、エスカレーションは避けられないものとなると結論づけている。こうして、クラウゼヴィッツは戦争の実践理論を、同時に概念的に首尾一貫したものとすてまとめ上げたのである。政治的な狙いから

は全く無関係に、戦術的ないしは戦略的レベルでの目的になつた狙いとは、敵の抵抗能力の破壊でなければならなかつた。それがクラウゼヴィッツの時代の軍隊の存在意義であつた。彼は一方がこれを成し遂げれば、敵は敗北を認めるしか選択の余地がないので、その政治的狙い（それがどんなものであれ）は自動的に達成されることになると考えたのである。

クラウゼヴィッツが戦争の歴史の研究を進めていくにつれて大規模な戦闘のほとんどが殲滅戦争まで至らなかつたという事実困惑するようになったことはよく知られている。クラウゼヴィッツは晩年、ナポレオンが戦つた戦闘は戦争のひとつのタイプでしかなく、実際には、もうひとつのタイプの戦争、すなわち、より限定された本質的に政治的な戦争も存在するにちがいないということに気づいたのである。しかし、彼はこうした認識の変化を『戦争論』に反映できないうちに亡くなつた。結果として、矛盾がその偉大な著作に残り、後世の多くの読者を混乱させ、多くの人々、特にドイツの将軍たちや編集者たちをその解釈において、原書を編集する際においてさえ、正道から逸脱させてしまうこととなつた。⁽¹⁰⁾しかし、近年の編集者たち、一九五二年に現代ドイツ語版を出版したヴェルナー・ハールヴェーク、英語圏ではハワードとパレットが原本の復活を試みた。その際、ハワードとパレットは、自らの解釈に基づいて、制限戦争と政治的手段としての戦争について強調した解説文を付した。⁽¹¹⁾

残念なことに、クラウゼヴィッツは制限戦争の理論を發展させなかつた。戦争の二面性を明らかにしている彼の有名な一八二七年七月十日付の覚え書には、戦争の極めて明白で根本的な法則と付带的な発見が描かれている。

戦争には二種類あり、敵を打倒することを目的に、敵を政治的に滅ぼすか、もしくは無防備にするかして、こちらに有利な和平を強いるための戦争と、国境周辺で敵の領土の一部を征服することだけが目的で、その征服した土地を保持するか、和平交渉の際の取引材料として使用するかするための戦争がある⁽¹²⁾。

敵を打倒する戦略は作戦目的が明確で、もうひとつのタイプの戦争のものは極めて対照的である。戦争には敵の戦闘力の撃滅以外にどんな狙いがあるのだろうか。確かに、例外はあるが、相手の領地の一部を征服するという狙いがある。クラウゼヴィッツの著作にこの種のより制限された作戦を裏打ちする原理の理論や概念を展開している形跡を探しても見つからない⁽¹³⁾。

さらに悪いことには、彼が政治を戦争に持ち込もうとしたことがこの議論を明快にするどころか、かえってより複雑にしてみせた。クラウゼヴィッツにとって、この問題の解答は英語では都合よく「政策 (policy)」と「政治 (politics)」と区別できるものの関係の中にありそうである。制限戦争というものは、単に限

定された政治目的を達成しようとする政治家による健全な政策から生まれるものではなく、その政治家が活動している政治システムの性質にも等しく依存している。クラウゼヴィッツは同時代の保守的な多くの人々と同じように、戦争の規模を拡大させる圧力もまた、「国民」の戦争への参加より発するもの（加えて、それは戦争に固有に備わっているもの）と信じていた。大衆の感情を制御するためには、強力な政府が必要である。したがって、理性のみが国民によって体现された「生まれながらに持つ盲目的な熱狂」に打ち勝つことができる。彼は政府の統制も戦争という現象に固有の規模を拡大させる圧力をどうか支配できると暗に述べている。クラウゼヴィッツはこの考えを彼の著作の第一巻の賞賛されている第一章の終わりに「奇跡的三位一体」と称して次のようにまとめている。戦争とは熱狂と行為と技術の相互作用である。国民が憎悪と敵意という荒々しい衝動に突き動かされる一方で、政府は確率と偶然のゲームをプレイし、軍隊は冷静な理性で戦争を政治の道具として機能させるのである⁽¹⁴⁾。

第二次世界大戦後の多くのクラウゼヴィッツ研究者たち、例えばフランスのレイモン・アロンやドイツのゲルハルト・リッターにとつて、この三位一体は戦争を制限するということを分析するにあつてのキー・コンセプトとなつた。しかし、この概念はクラウゼヴィッツの『戦争論』全体の中で一度しか登場しない⁽¹⁵⁾。リッターが道徳的な政治家について強調したり、アロンが「理

性」について強調したりすることは、単に戦争を制御する前提条件としての国家を基礎とする構造ばかりでなく、特殊な国家に対してさえも背信行為である。⁽¹⁶⁾ リッターとアロンがともに政治と戦争に国民が次第に巻き込まれていく様相を注視する保守主義者であったことは驚くにあたらない。

そのような思想は明らかに戦後のヨーロッパの政治展開と全面的に符号するものではなかった。政治と戦争の関係についての支配的な見解は、それまでのものとは根本的に異なる非クラウゼヴィッツ的なアングロ・サクソン風のリベラルなものとなった。

つまり、総力戦に対する最良の防御策は強国であることではなく、民主的政体であることなのである。しかし、独裁制的な考え方や民主主義的な考え方にどれほどの妥当性があるうとも、どちらも限定的な政治目的をどのようにして限定的な軍事目的に変換されるのかについての解答を出せずにいる。いずれの考え方も、仮に政治家や政府が政治的な目的を制御し続けるならば、軍事作戦の目標が適切で、戦争も全体として制限されたものにとどまるということ暗黙の前提として⁽¹⁷⁾いる。

政治と戦略の関係は、政治家、軍人そして学者を悩ませ続けている。政治のレベルでは、西洋の政府はおそらく不承不承ながら、限定された目標というものを受け入れるに至っている。湾岸戦争、ボスニア紛争そしてコソヴォ紛争は（かつての朝鮮戦争やベトナム戦争と同様に）、そうした意味で制限戦争であった。政

府はおそらく国内の有権者から強力な道義的な圧力を感じながら、サダム・フセインをイラクの権力の座から引きずり降ろそうとしたし、セルビア人には、彼らのボスニアやコソヴォでの人道的な見地から行き過ぎと判断される行為に対する代償を払わせようとしたのであろう。しかし、国の存亡に関わるほどの問題ではないため、介入することによって生じ得るコストが気になって、事を注意深く進め、実力行使するのはあくまでも最後の手段であるといった否応なしの現実主義路線を選択した。⁽¹⁸⁾

これらの紛争ではどれも、限定された政治目的を限定された戦術目的に変換することがあまりうまくいかなかった。特に、アメリカ軍の場合、ベトナム戦争の結果、「制限戦争」という言葉は愚かな政策、愚かな戦略、そして敗北の代名詞となっている。当時の統合参謀本部議長コリン・パウエル將軍は一九九二年十月、『ニューヨーク・タイムズ』のインタヴューに答えて、この点を以下のように要約している。「限定的に介入せよと命令されれば、それは結果を出そうが、出すまいがかまわないということですし、『外科手術』を命じられれば、私は『バンカー（地下掩蔽壕）』を狙うことになるのです。」⁽¹⁹⁾

クウェートを侵攻したイラクに対する戦争は政治家と軍人に政治的決着と作戦目標、そして軍事的手段のバランスをどうとるかという課題を突きつけた。アメリカの政府と軍部はこれらの困難を如実に反映している表現でそれぞれの目標について述べた。一

方では、高官が「絶対的で完全な勝利」を勝ち取るためにイラクに対して「圧倒的な」戦力を行使すると宣言した。⁽²⁰⁾しかし、他方で、彼らはこの戦争の政治目標がクウェートの解放に限定されていると繰り返し念を押し続けた。⁽²¹⁾このように、追求される勝利の形態と行使される手段が、公言された究極的な戦争目的と整合しなかったのである。

この矛盾の原因は何であつたのだろうか。その答えのひとつは明らかにその政治的な都合主義である。戦力の大規模行使で「敵の殲滅」を威嚇して脅すことが（フセイン政権をついでに転覆させると何度も脅しながら）フセインをこわがらせて本格的な交戦状態に入る前に降参させる良い戦略であると考えられたに違いない。同時に、この現代のヒトラーとの戦いは重大事であり、政府は敗北はもちろん中途半端な勝利すら受け入れるわけにはいかないということアメリカ国内の世論に納得させる必要があつた。しかし、このことは「絶対的で完全な」勝利といった類の言葉の意味や、政治目的と戦略目的との関係について政策立案者の一部に本格的な混乱が生じたことをも反映していた。

アメリカの軍部は政治指導者の威嚇を真剣に受けとめた。多国籍軍司令官ノーマン・シュワルツコフ將軍は伝統的なクラウゼヴィッツ流の作戦を計画した。この作戦は（シュリーフェン將軍が一九一四年にフランスを打倒するために計画した悪名高い作戦に似て）、史上最大の殲滅戦のひとつであるカンネーの戦いから

発想されたものである。後にシュワルツコフ將軍が述べているように、三日目の作戦が終了した後、「地上戦は文字通りカンネーの戦いの殲滅戦の様相を呈するところであつた……。」「しかし、シュワルツコフが決定的な勝利をものにしようになつたであろうどその時、大統領によって作戦の停止を命ぜられたのである。⁽²²⁾將軍は彼のカンネーの戦いを完遂すべく作戦の継続許可を要請したが、却下された。シュワルツコフは彼の作戦継続許可の要請が大統領の軍事行動停止という決断に反対するつもりではなかつたと大統領との不一致を否認したにもかかわらず、軍の作戦レベルでは、作戦計画はクウェートを解放する（すなわち、クラウゼヴィッツ流の表現を借りれば、国境周辺の敵の領地の一部を征服する）だけではなく、イラク軍を無力化することを狙つていつたことは明らかである。

このシュワルツコフの例は、長い間懸念されていたひとつの論点、戦争は他の手段をもつてする政策の継続であるという命題が現実の問題ではなかつたことが判明したことを表している。クラウゼヴィッツを起源とするこの原則は受け入れられている。シュワルツコフは大統領の決定を甘受した。しかし、他方、察するに、もうひとつのクラウゼヴィッツの制限戦争についての考え方が明らかに底の浅いものであることを証明した。軍事作戦は制限戦争などというしろものではなかつた。ボスニアやコソヴォへの介入のシナリオは、西洋の軍がいまだに殲滅戦争の戦略をベース

に作戦を考え続けていることをも表している。この二つの軍事介入に大規模な地上軍が必要であるとされているところにこのことが表れている。例えば、ボスニアでは最小限十二万人が投入されねばならないと提案されたが、しかし、軍は一般に四〇万人から五〇万人の兵力が望ましいとしていた。⁽²³⁾ コソヴォでもほぼ同じ規模の兵力が要求された。

「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」は矛盾に満ちたものとなった。既述のように、一九七六年のハワードとパレットによるクラウゼヴィッツ『戦争論』の翻訳出版は、確かに、制限戦争という概念を公に確認するという意味があった。この英語版『戦争論』は米国の陸・海・空軍の戦略大学で一九七〇年代末に教科書として採用されたが、制限戦争論は米国の三軍から全く拒絶された。事実、クラウゼヴィッツは最後には制限戦争論に反対するために二通りのやり方で使われた。一九七〇年代末から一九八〇年代初めにかけて、ベトナム戦争での米国の失敗をクラウゼヴィッツの理論からその原因を説明して米軍に教示し、これからの戦争に備えて米軍が何を準備すべきかの分析を提供するプロジェクトの責任者であった米国陸軍大佐ハリー・サマーズはたいへん有名になった著書『戦略論——ベトナム戦争の批判的分析——』で、一九六〇年代の米国の政策立案者は「国民の意志に訴える」ことと、アメリカ国民を動員することに失敗したと主張している。⁽²⁴⁾ 言葉を換えれば、政策に集中することによって、政治の重要性に気

づかなかつたのである。次にサマーズは、歴代の米国政権が戦略レベルで漸進的かつ段階的な対応を採ったことが失敗を招いたと言わねばならないと論じている。結果的に、紛争に米軍部隊を逐次投入することになり、その紛争で勝利するという強い意志を伝えられなかつたのである。圧倒的な戦力の行使と勝利への飽くなき執念のみが、勝利をもたらすことができたはずである。⁽²⁵⁾ 皮肉にも、ハワードとパレットは翻訳する際の制限戦争についての独特な偏向にもかかわらず、本物のクラウゼヴィッツの殲滅戦略の主張者としての像を隠すことはできなかった。

冷戦後、米軍が戦場に戦いを戻そうとしていることに共感し、明確な作戦の概念を求める者はいようが、カンネーの戦いのようなものから発想した戦略的ドクトリンを採用することが賢明かどうかいぶかっている者もいる。かつて、カンネーの戦いに精通していたドイツ陸軍参謀総長シュリーフェン伯爵にとつて、このアイディアはあまりうまくいかなかった。ひとつには第一次世界大戦の例が（第二次世界大戦でもそうなのだが）、殲滅戦略は途方もない戦争拡大の圧力を生み出すということを示している。勝利を勝ち取るのに必要とされる努力故に、殲滅戦略は安易に政治的目的を膨張させる。結局、目的が手段を正当化せねばならない。この問題は湾岸戦争でも現出した。湾岸に展開した大規模な軍事力が、ただクウェートの解放に成功しただけで、すべての元凶である煽動者フセインを追い落とすことに失敗した時、明らかに米

国には失望があった。殲滅戦略というドクトリンには伝統的な大規模の通常戦力が使用される国家間の紛争には依然としてある程度の妥当性（不安定な妥当性ではあるが）があるが、いやしくも西洋の軍隊が直面している発生する可能性のはるかに高いタイプの紛争に、これが効果的かどうか疑問を覚える者もいるはずである。我々の軍事戦略はエスカレートして、（敵を）撃滅できる能力を基礎としている。しかし、一方で、我々の政治的な直観はエスカレーションと過度の死傷者の発生という危険故に、抑制を求めている。ボスニアやコソヴォのケースのように、仮に、ある脅威が真に圧倒的な軍事行動を当然とするほど深刻なものでないならば、有力な戦略ドクトリンは麻痺状態もしくはは政治的かつ戦略的に混乱した介入に対するひとつの対処法である。仮に、これまでの関わりから、この戦略が当然のこととされたならば、関与の度合いは巨大な圧力のもとで、軍事行動を実際に正当化するほどまでに高められていくことになる。いずれにしても、圧倒的な戦力をもつてするドクトリンは現代世界ではあまり賢明と言えるものではない。

事実上、西洋世界は袋小路に陥っている。つまり、不干渉政策や封じ込め政策があまりにも防衛的とされる一方で、現行の軍事ドクトリンはあまりにも攻撃的である。それゆえに、現在の紛争が限定的な戦力の行使で解決、ないしは制御され得るかどうかを問うてみるのが唯一の代替案である。しかし、限定された戦力

というものが効果的であろうか。仮に、紛争を煽動する人々の動機がある目的を達成するために力を行使するという意味で、また、戦争が何らかの因襲に従うことを受け入れるという意味で、合理性を保持しているならば、反撃がより精密的を絞って行われ、反撃する戦力も想定上、制限され得るという思想を受け入れることが可能になる。

コソヴォ紛争は制限された戦力に関する問題点と可能性を提示している。たとえ政治目的が極めて明確であったとしても、これを軍事目標に変換するのは右から左へ動かせば済むといった簡単なものではない。西洋の政治指導者も軍部もセルビア人の行動を考える上で前提としていたものが誤ったものであった。政治家の方は小さな戦力でも（どんな戦力であれ）セルビアの指導者（ポダン・ミロシェヴィッチを即座に屈服させられると信じていた。他方、軍の側（特に軍事力行使を計画し大部分を実行した米空軍）は、これを近視眼的なアプローチであると考えていた。そこで軍は再び迅速かつ妥協なき圧倒的な軍事力の行使を提唱した。それは湾岸戦争でも使用され、半世紀以上にもわたり計画され実行された戦略爆撃作戦の「教訓」をベースにした陳腐な計画の実施を提唱するものであった。政治家も軍人もセルビア人を注意深く分析したわけではない。政治目的を達成しようとするれば政治家が考えている以上の軍事力が必要であり、軍部が考えているよりは少ない軍事力で充分であった。両者ともにミロシェヴィッチ

チが讓歩した時、驚き、なぜ彼が讓歩したのか説明できなかつた。米空軍の作戦計画はセルビアに壊滅的打撃を与えると信じるに足るほどのレベルには全く達していなかった。ミロシエヴィッチが讓歩したタイミングと空爆の展開とを関連づけることができなかった。

以来、なぜミロシエヴィッチが降伏したのかは、様々な憶測を呼んでいる。ここではこの問題について詳しく論ずることはできないが、ミロシエヴィッチを降伏に向かわせた鍵となる要素は、セルビア国民に対する統率能力を喪失しつつあるという意識が次第に大きくなったことである。ベルグラードのテレビ塔（並びに他の放送施設）への爆撃によって、政府の正確な声を国民に伝えることができなくなり始めた。同時に、コソヴォではセルビア兵士の死傷者数が増大し、取り乱した親族たちがデモ騒ぎを始めた。ミロシエヴィッチは（こうしたデモが二〇〇〇年の彼の失脚をもたらしたことが証明しているように）大衆の支持を基盤にしたタイプの指導者だったので、これは重大な事態であった。けれども、テレビ塔やセルビア人兵士たちは目標としての正当性という点で西洋では問題があると見なされていたことに注意してもらいたい。さらに、コソヴォのセルビア人部隊を空爆することは、米空軍には爆撃作戦への集中力を損なうものとして歓迎されざる行為と見られていた。明らかに、これらの目標の重要性は理解されていなかったのである。

国民を統率する力は次第に失われていき、それがミロシエヴィッチが讓歩するのに必要な前提条件となつたわけであるが、いずれもミロシエヴィッチがなぜあの時点で決断したかを説明していない。筆者はこの点で重要な要素となつたのは軍事的なものでは決してなくて、むしろ法的要因であつたと確信している。その根拠は次のようなものである。ミロシエヴィッチが降伏を決心したのは、彼がハーグの国際戦犯法廷から戦争犯罪人として起訴されたことを知つた直後の夜のことである。この起訴の件は彼の士気を激しくぐらつかせ、今、取引させず、後で再交渉したら、もはや機会は失われるのではないかと悟つたようである。この結論には異論があろう。しかし、何を原因と考えようと、ミロシエヴィッチの決断に時の軍人と政治家がともに驚きの色を隠せなかつたことは、西洋側にはセルビア人の行動の動機や価値観について理解する上でまぎれもない弱点があることを示唆している。

この事例が我々に既製の制限戦争ドクトリンを与えてくれているのではない。我々の西洋的伝統が与えてくれるわけでもないナポレオンやクラウゼヴィッチ以前の時代にもヨーロッパでは制限戦争が戦われていた。しかし、当時の人々は制限戦争に関する理論やドクトリンという手の込んだ体系化の恩恵に浴することなく制限戦争を戦っていたのである。確かに、一九五〇年代に（「制限戦争」という言葉も含めて）理論の体系化が行われたが、この理論は最近の紛争に対応するドクトリンの確立にさほど貢献して

いない。一九五〇年代の制限戦争論は超大国間の核戦争の可能性を背景として米国で発展したものである。この要素は、制限戦争論を極めて特殊なものにした。米国もソ連も相容れないイデオロギーを保持していると考えられていたので、紛争の結末には、どちらか一方、もしくは双方の体制の崩壊を含めざるを得ないということが前提であった。しかし、紛争の過程でどうしたらどちらかの体制を破壊からまぬがれさせることができるのであろうか。無制限な目的を達成しようとしながら無制限な手段の行使を制限できるだろうか。その解決策はありそうもないので限定核戦争理論なるものは非現実的とされ、最終的にはほとんどの理論家がソ連との戦争はお互いに回避した方が良くと勧告することになったのである。

ソ連を直接的には巻き込まない紛争や、核の応酬に至る危険性を直接には含まない紛争に関しては、抑止や強制を理論化した大量の論文が世に問われており、それが限定された戦力による威嚇やその行使に関して人々、共同体、国家が共有する共通の価値観や脆弱性を明らかにするより良き出発点を提供することになったようである。しかし、このアプローチの最大の欠点はこれが脆弱性と紛争解決の機会を見つけるのに重要と考えられる文化的要因を無視していることである。代わりに、このアプローチは人間の行動をほとんど条件反射と想定している。合理性がひとつの特定の文化によって定義される合理的行為者モデルはほぼ不可避免的

次のような結論を導く。他の文化圏からやってきたナショナリストやテロリストのような指導者たちは、彼らがアメリカの政治学の諸研究所が予測する刺激に対する反応を示さなければ、彼らは不合理である。

結論として、クラウゼヴィッツの著作に横溢するエスカレーションと殲滅戦略の強調は、(たとえかつては優れていたとしても)もはや優れた思想とは言えない。しかし、力という手段や目的と手段に関する彼の思想は、(陳腐かもしれないが)依然として極めて有効である。戦争は依然として、何らかの目的を追求し、力の行使に固有の特徴を持つて組織された共同体間で戦われる。それらの目的はもはや国益の擁護のみに収斂せず(依然として多くのエスニック・グループはそれに収斂しているが)、その手段もはつきりとした軍事力ではなくなったが、軍事力はいまださらに特別の文化的に定義された目的のために行使されている。それらの目的を知ること、そしてある敵がどのようにそれらの目的を達成しようとするのか、また、敵がいつまで戦うつもりであるのかを理解することが、敵に影響を及ぼす方法と敵を妥協させる方法を切り開いて把握することにつながるのである。ここに西洋の軍隊にとっての挑戦すべき課題がある。つまり、この文化的な現象を扱う制限戦争という作戦上の概念を案出する課題である。

ここで我々はクレフェルトがその著『戦争の変遷』で展開した二つの優れた考えに立ち戻る。第一に、いつの時代のどの地域の

人々でも戦争の因襲や法律の理解をベースにして、戦争をある程度、制限することを受け入れている。第二に、オランダの偉大な歴史学者ヨハン・ホイジンガが半世紀以上も前に「戦争は政治の道具以上のものであり、文化的に決定されたゲームのような質を有している」と論じている⁽²⁶⁾。戦争が異なる文化の間で異なる方法で果たす役割を理解するには、制限戦争に関する我々の考え方のルールを探らなければならない。我々の敵（そして、我々自身）がそれに基づいて行動するルールを理解してはじめて、我々はこの真剣な戦争ゲームの結末に影響を及ぼすことができるのである。

註

(1) これらの脅威の深刻さについての筆者の見解は以下の論文の中で述べられている。Jan Willem Honig, “New Conflicts: Risks and Challenges”, in Heinz Gärtner, Adrian Hyde-Price and Erich Reiter, eds., *Europe's New Security Challenges* (Boulder, Colo.: Lynne Rienner, 2000).

(2) Martin van Creveld, “What is Wrong with Clausewitz”, in Gert de Nooy, ed., *The Clausewitzian Dictum and the Future of Western Military Strategy* (The Hague: Kluwer Lan International, 1997)を参照。また、彼の著書 *The Transformation of War* (New York: Free

Press, 1991)は Brassey社から *On Future War* というタイトルで、英国でも出版された。

(3) Carl von Clausewitz, *On War*, trans. and eds. Michael Howard and Peter Paret (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1976; 2nd ed., 1984).

(4) Carl von Clausewitz, *On War*, trans. J. J. Graham (London: N. Trübner, 1874), rev. ed. F. N. Maude (London: Kegan and Paul, 1908); Clausewitz, *On War*, trans. O. J. Matthijs Jolles (New York: Random House, 1943). これらの訳書の商業的失敗に関して詳しくは Christopher Bassford, *Clausewitz in English: The Reception of Clausewitz in Britain and America, 1815-1945* (New York: Oxford University Press, 1994), pp. 58, 183 を参照。

(5) この点について、ハワードとパレットが今日の状況や現代人としての関心に影響されているという点について二つの簡単な例を提示したい。彼らは原書では政治家と将軍が同一人物として論じられているにもかかわらず次のように翻訳している。

「政治家及び将軍が下すべき第一義的な、最も重要な、最も決定的な判断は、その着手しようとする戦争について……正確に把握するに在り」(Clausewitz, *On War*, p. 88 with Carl von Clausewitz, *Vom Kriege, Hinterlassenes Werk des Generals Carl von Clausewitz*, ed. Werner Hahlweg, 18th ed. [Bonn: Dümmler, 1972], p. 212.) また、第八篇第四章のタイトルは、原書では

“Niederwerfung”とあるところを“それほど決定的で衝撃的でない” “defeat” (打倒) と翻訳している。

(9) ハの兵びつらつた van Creveld, “What is Wrong with Clausewitz” と *The Transformation of War* 及びパレットのクラウゼヴィッツの伝記を書評した重要な論文 C. B. A. Behrens, “Which Side Was Clausewitz On?” *The New York Review of Books*, 14 October 1976 がその事実を指摘している。

(7) 例えが *Vom Kriege*, Book VI, Chapter 28, esp. pp. 820-822; Book VI, Chapter 8, pp. 658-659; Book VIII, Chapter 3A, p. 959 を参照。クラウゼヴィッツが生前、一八〇六年の戦闘について評画した著作は極めて少ないが、そのうちの一つが Clausewitz, *Historische Briefe über die gro en Kriegerereignisse im Oktober 1806*, ed. Joachim Niemeyer (Bonn: Dümmler, 1977) である。

(8) Azar Gat, *The Origins of Military Thought from the Enlightenment to Clausewitz* (Oxford: Clarendon Press, 1989), p. 200 を参照。

(6) ハワードとパレットは “wehrlös” をあおり正確でない “powerless” と訳している。

(10) ヴェルナー・ハールヴェーク版の序文 (Clausewitz, *Vom Kriege*, 18th ed., pp. 69-72) を参照。

(11) 但し、注 (2) も参照。

(12) Clausewitz, *Vom Kriege*, 18th ed., p. 179. 筆者が原文を英訳した。

(13) 作戦目的のリストには決戦の目的以外のものは見つけることができなかつた (Clausewitz, *Vom Kriege*, Book VIII, Chapters 5, 7 and 8 を参照)。

(14) Clausewitz, *Vom Kriege*, Book I, Chapter 1, p. 213 を参照。

(15) Gerhard Ritter, *Staatskunst und Kriegshandwerk: Das Problem des Militarismus in Deutschland*, Vol. I, *Die altpreuussische Tradition (1740-1890)* (Munich: Oldenbourg, 1954); Raymond Aron, *Penser la guerre*, Clausewitz, Vol. I: *L'âge européen* (Paris: Gallimard, 1976). ほか P. M. E. Volten, “De wonderlijke drieuldigheid”, Rede uitgesproken bij de aanvaarding van het ambt van bijzonder hoogleraar in de krijgsgeschiedenis, in het bijzonder van de veiligheidsproblematiek, aan de Rijksuniversiteit te Utrecht, op 11 November 1985 などを参照。

(16) Gerhard Ritter, *The Sword and the Scepter: The Problem of Militarism in Germany*, Vol. I: *The Prussian Tradition, 1740-1890*, trans. Heinz Norden (Princeton Junction, N.J.: The Scholar's Bookshelf, 1988), p. 325 (Afterword to the 2nd and 3rd editions); Raymond Aron, *Penser la guerre*, Clausewitz, Vol. 2: *L'âge planétaire* (Paris: Gallimard, 1976), p. 174.

(17) 「制限戦争」という用語は一般的になっているが、クラウゼヴィッツ以来、戦争と戦略に関してのコンセプトの展開を詳細に分析すると、最も印象的な結論のひとつは制限戦争という概

念の不在である。伝統的に蓄積される知恵とは反対に、この制限戦争という概念と格闘している人物が一握りだけ、それも第二次世界大戦以来存在するのだが、その概念の形成はうまくいかなかった。現在、筆者はこのテーマについて別の論文を準備中である。

(18) 受け入れ難い体制との気の進まない妥協や軍事力を行使するのに要するコストをいやいや支払わねばならないことよって生ずる緊張からくる道徳的な課題は、人道的な介入に重大な問題をもたらした (Jan Willem Honig and Norbert Both, *Srebrenica: Record of a War Crime* [New York: Penguin, 1997] を参照)。

(61) Colin Powell, *My American Journey* (New York: Ballantine Books, 1996), p. 544より引用。(邦訳はコリン・パウエル著「鈴木主税訳」『マイ・アメリカン・ジャーニー』[角川書店、一九九五年]六六一頁より。)

(20) 「戦争が始まったら受け入れられる唯一の結果は絶対的で完全な勝利である。」「サダム・フセインは我々の対応が圧倒的なものになることを知っているとと思う。」それぞれデイック・チエイニー国防長官の『インターナショナル・ヘラルド・トリビューン』紙の一九九〇年二月二二・二三日付及び二四・二五日付に記載されている発言。「信じたまえ、我々の作戦は迅速に大量に決定的に行われ、我々は勝利する。」一九九一年一月二日付の『ワシントン・タイムズ』に記載されているダン・

クエール副大統領の発言。同様に、一九九〇年十二月四日付の『ニューヨーク・タイムズ』に掲載されている上院軍事委員会でのコリン・パウエル統合参謀本部議長の証言も参照。

(21) 「我々の目標は明確である。サダム・フセインの軍隊がクウェートから撤退し、クウェート正統政府が本来の位置に復帰し、クウェート人が自由になることである。」一九九一年一月十七日付『ニューヨーク・タイムズ』に記載されているブッシュ大統領の発言。同様に、『ニューヨーク・タイムズ』に掲載された一九九〇年十二月四日の上院軍事委員会でのチエイニー国防長官の証言も参照。

(22) 湾岸戦争計画におけるカンネー構想の重要性はBBCの最近のドキュメンタリーでシュワルツコフ將軍によって確認されている。シュリーフェン構想におけるカンネー原理の重要性については、Alfred von Schlieffen, *Cannae* (Berlin: E. S. Mittler, 1925) を参照。

(23) James Gow, "Nervous Bunnies: The International Community and the Yugoslav War of Dissolution", in Lawrence Freedman, ed., *Military Intervention in European Conflicts* (Oxford: Blackwell for *The Political Quarterly*, 1994), p. 26.

(24) Harry G. Summers, Jr., *On Strategy: A Critical Analysis of the Vietnam War* (New York: Dell, 1984; orig. 1982), p. 43. 米軍におけるクラウゼヴィッツの再発見と軍のカリキュラムへの導入につ

らした' Summers, *On Strategy II: A Critical Analysis of the Gulf War* (New York: Dell, 1992), pp. 61-150 を参照。

(21) Summers, *On Strategy*, pp. 83, 104-105, 116-117. また Summers, *On Strategy II* へ Christopher M. Gacek, *The Logic of Force: The Dilemma of Limited War in American Foreign Policy* (New York: Columbia University Press, 1994) を参照。

(22) Johan Huizinga, *Homo ludens, Proeve eener bepalende van het spel-element der cultuur* (Haarlem: Tjeenk Willink, 1974; orig. 1938).

(平成十三年二月二十三日、戦史部が担当して開催した研究会のために作成した原稿を翻訳したものである。)

◎筆者紹介◎

一九五八年生まれ。一九九三年からロンドン大学キングズ・カレッジに所属。一九九七年から現職。戦争学博士、史学博士。
Defense Policy in the North Atlantic Alliance: The Case of the Netherlands (Praeger, 1993); *Srebrenica: Record of a War Crime* (Penguin, 1997) (co-authored with Norbert Both) など、著書・論文多数。